「社会行動主義」とG. H.ミード・Ⅱ

——G. H. ミード『行為の哲学』に向けて（その2・b）[(1)]——

安　川　　一

5．社会的対象の理論——「他者」と「自己」

ミードが「意味の意識」として主題化したものを，あらためて整理してみよう。

「意味」は社会的行為との関連で，刺激—反応の関係性として，社会的状況に客観的に存在する——「意味は，社会的行為の特定位相間の関係として，そこに客観的に存在する何物かが発達したものであって，その行為への心的添加物でも，伝統的に考えられてきたような『観念』でもない」(MS 76)。その発生基盤は社会的本能に導かれた「身振り会話」である——「社会的行為において，ある個体の身振りが別の個体によって適応的に反応される時，この反応がその身振りの解釈，すなわち，その身振りの意味である」(MS 78)。けれども，このような「意味」は，意識に上ることもあれば上らないこともある。例えば，刺激と反応が完全に結合している習慣的動作場面では，「意味」は意識に上らない。「意味」は行為の深層に沈んだままである。だが，諸々の動作の流れが幾重にも相互中断を繰り返す恒常的葛藤状況——社会的状況——では，抑止された社会的行為を滞りない流れ——適応的関係性——に戻すべく，他者の外的な動作や動作の構えが注意の対象となる。「意味」が意識され，刺激—反応の関係性の中に，他者が意識に上るのだ。

なるほど，「他者は異なる人物であり，異なるがゆえに彼の苦悩は私の苦悩とは違う。しかし，その苦悩する存在に私は直接に反応する」(1914:62)。社会的状況に私自身と同一の身体性と「行為性」をもって関与している存在，具体的には，私自身の行為を中断させ，また，私自身の動作から影響を受けるものとして現れる，外的な動作と動作の構え，それが他者である——「人は，顔の表情であり，声の調子であり，示威的な，あるいは親しげなポーズであり，

また，話しぶりである」(1917b:187-188)。そしてこの「動作」としての他者は，私とともにその状況に関与し，焦点となる自他関係の中に一定の機能性として「存在」を確認されるものである。この意味で，他者とはまさに「直接の社会的反応の副産物」なのだ（1914:61)。そしてこの時，「自己」もまた同時に意識に上る。

「社会的行為においては，自分自身の反応の感覚がおのずと注意の対象となる。なぜなら，自分自身の反応は，第一に，それらを引き起こした他者の態度の解釈となっているからであり，また第二に，自分自身を他者の行為の刺激として価値づけるための素材を与えるからである。こうして，我々はここに，自分自身の反応，自分自身の行為習慣を分析し，意識にのせるための，そして，これらを引き起こした刺激からこれらを区別するための，機会と手段を見出すことになる。機会は，他者の行為を規定しようとして反応を返そうとする際に見出される。手段とは身振り――我々自身の態度や動作を感じ取る際に現れる，社会的作用の端緒である」(1910b:132)

まさしく，「意味の意識は自己意識と密接に結び付いている」(*ibid.*)。社会的状況に根ざす「意味の意識」は，他者意識と自己意識をその内に含むものなのである。

「意味の意識」の議論は，こうして，意味の客観的存在の「場」である社会的状況――刺激―反応の具体的連鎖――を主題化し，他者と自己をそこに基礎づけるものとなる。社会過程に議論の焦点が据えられる。ミードが，社会科学は，「内省的自己意識の前提条件として，様々な対象や，相互関係や，自己を含んだ社会集団を呈示・分析しなければならない」と論じたのも（1909:103)，また，方法論的「内省」にたよる心理学の「唯我論」的体質を批判して，物理科学における物理的世界の物理的対象と同様の意味で，他者を客観的に所与のものと受け止めるべきこと，さらにこれを社会過程との関連で扱うべきことを主張したのも（1919a:107-109)，こうした前提に立つものだ。

ところで，社会的状況における自己と他者，すなわち社会的対象をめぐるこのような議論は，ミードの知覚論に通じるものである。(2) 知覚は，個体―環境の適応的関係が失われた状況に発現する，関係修復のための，時間的広がりをもった適応的活動であるとされた。(3) また，知覚対象は，こうした「関係」を「仮説的」に表象するものとして，この活動の内に位置づけられた。すなわち，知覚

対象とは，感覚刺激と記憶イメージの融合からもたらされる構成体（「折りたたまれた行為（collapsed act）」），つまり，適切な刺激と反応の結び付きによって行為を一定の結果に導くことを保証する，言い換えれば，行為を「離隔刺激の影響下で操作＝接触経験へと導くことを保証する」，行為の一位相とされたのだ（1912:134）。そしてミードは，こうした議論を社会的対象にアナロジカルに適用する。すなわち，社会的対象は，社会的行為を仮説的に表象する行為の一位相だとされた。

「物理的対象がそれへの我々の反応から定義されるように，社会的対象は社会的行為という見地から定義されるであろう。対象は，行為への刺激についての感覚刺激と，その行為の究極的結果に関する過去の経験についてのイメージから成っていることが分かった。してみると，社会的対象は，身振り，すなわち，他者に現れる，進行しつつある社会的行為の端緒となる指示と，そうした刺激に対する我々自身の反応についてのイメージから成るということになるだろう」（*ibid.*:137）

その過程は，例えば，幼児が身体感覚を獲得する過程に似ているという。

「対象の型枠（form）は，身体―自己（physical self）以外の事物についての経験の中に与えられる。幼児は，様々な器官感覚や感情的経験とともに様々な身体部分を総合するようになるが，このことは彼の周囲にある対象をモデルとしてなされるであろう。器官感覚をともなって，喜びや痛みの経験があったとしても，こうした素材が対象の図式（schema）――つまり感覚刺激と反応イメージからなる図式――に当てはまらないのであれば，この素材だけでひとつの対象が構成されることはないだろう。……そして，このことは，社会的行為に現れる対象，すなわち自己についても当てはまる。社会的対象の型枠は，まずもって他者に関する経験の中に見出されなければならないのである」（*ibid.*:138; 傍点は引用者）

こうして，他者に影響を与える自分自身の身振りと過去の経験からもたらされる行為イメージとの融合体として，自己は，社会的状況の中に「ひとつの知覚対象として姿を現す」（1914:63）。対象の知覚が，「可能な行為との関連で，それとの間に一定の関係を結ぶこと」であるように（*ibid.*:64），自己の意識は，社会的行為に関わる自他の関係性の表象だからだ。言い換えれば，自己とは，個々の社会的状況において行為関連性に主題化された「私」，状況の意味

作用によって顕在化される「状況の関数」だということだ。

「子供の初期の社会的な知覚対象は他者である。これが経験されたのちに，不完全で部分的な様々な自己――あるいは『me's』――が生じる。それは，子供が手足を知覚するのとまったく類似のことであり，それらが知覚されて後に自分自身が全体として知覚されるようになるのである」(1912:139)

では，こうした「状況の関数」としての自己は，どのようにして「私」の経験の領域にもたらされるのだろうか。言い換えれば，「人間の社会的行為の過程に，『me』を，すなわち対象である自己を出現させるものは何か」(*ibid.*)。――回答は，音声身振り（vocal　gesture）の概念によって与えられる。身振りを発した個体が，その身振りによって（それを聞いて）他者と同様の影響を受けることができる，という身振りである。

「人間は，彼が他者を刺激するのと同じようにして自分自身を刺激することができ，また，彼が他者による刺激に反応するのと同じようにして自分自身による刺激に反応することができる。この事実によって，人間の行為には社会的対象の型枠がもたらされる。ここから『me』が生じ，これにいわゆる主観的経験が結び付けられることになるのである」(*ibid.*)

音声身振りを通じて，行為に関わる自他関係の一方の項としての自己が，「対象刺激と反応イメージ」からなる「対象の型枠」に則して「意識」される。この型枠のもとに，「社会的対象」としての，客観的自己としての「me」が形作られるのだ。それはまた，「意味の意識」としてミードが主題化したものでもある。問題状況が，刺激―反応の関係性，すなわち「意味」の中に，一定の性格をもった行為図式に則して主題化的に意識され，自己はその一部なのだ。社会的状況において，「社会的対象の型枠」に合わせて構成される自己は，「自分自身が発する刺激と自分自身の反応との融合」(*ibid.*:140)，その意味で，状況の意味作用の所産である。

「従って，このような『me』は，最初から形成されているもの，そして，他の人々の身体へと投射・放出され，これらに人間としての生命の息吹を吹き込むようなものではない。むしろそれは，社会的対象の領域から，我々が内的経験と呼ぶ無定形で無組織の領域へと移入されるものなのである。この対象，すなわち自己が組織化されるにともなって，こうした素材がおのずと組織化され，いわゆる自己意識という形で，個体のコントロール下

に置かれるようになるのである」(*ibid.*)

こうして，物理的対象，社会的対象――他者，そして自己――は，行為の過程で，「対象の型枠」に従って状況から抽出されるものとされる。そして，この「型枠」が問題になる「状況」とは，とりわけ社会的状況である。ミードは後に，「物理的対象は自然に対する社会的反応から我々が行う抽象である」と述べた（MS 184)。「社会的意識は物理的意識に先行していなければならない」(1910a:112―13）とも論じている。社会的状況において刺激―反応の関係性として抽出された「型枠」が，社会的対象の，また，物理的対象の形質を状況特定的に規定するということである。そして，それはまた，自己と他者を様々な社会的関係の中で状況特定的に多元的に構成していくということでもあるのだ。

「自己が現れる時には，そこには常に他者についての経験が含まれている。自己がそれ自体単独で経験されることはありえない。……他者の反応が個体の経験，あるいは行為の不可欠の部分となった時，他者の態度の取得が個体の行動の不可欠の部分となった時，その時，個体は自分自身の経験において自己となる。こうしたことが起こるまで，個体が自己として姿を現すことはないのである」(MS 195)

まさに，「我々自身の自己と他者の自己との間に確固不動の境界線など引くことはできない」(MS 164）のである。

6．社会的自己の理論――「I」と「me」再考

こうして自己意識の起源を社会的状況における意味作用に基礎づけた後，ミードの議論は再び自己の主観的位相と客観的位相――「I」と「me」――に転じる。論文「社会意識のメカニズム」(1912)，「社会的自己」(1913）である。

およそ10年前，論文「心的なものの定義」(1903）に示された議論を確認しておこう（cf. 安川　1986a)。「me」は，問題状況に遭遇した個体の行為を媒介・コントロールするために，仮説構成の条件，もしくはデータとして内省過程に入り込んでいく個体自身であった。すなわち，抑止された行為を適応的に回復すべく媒介する有意味な対象――ひとつの表象――であった。これに対して，「I」は，意識の流れに直接に経験される「個体としての個体」であった。古い既存の習慣的行為図式が崩れ去り，新しいそれが現れんとするまさにその時に，様々な行為傾向間の葛藤から新たな行為図式を導き出す仮説構成的「機

能」，それが「Ｉ」であった。

しかし，10年を経て，ミードの論述は，決定的にその力点を変える。「Ｉ」の直接経験可能性が否定される。そのような「Ｉ」は直接経験の範囲を越えたものだとされる。

「『Ｉ』が意識の中に対象として存在することはありえない。内的経験の会話的性格によって，すなわち自分自身の発話に対応していく過程によって，『Ｉ』なるものが，意識に現れる身振り，あるいはシンボルに応じて舞台の背後に暗示されるだけだ。カントの超越論的自我，あるいは，ジェイムズが舞台の背後に捉えた，観念の縁にしがみついてこれをますます強大化している魂がこの『Ｉ』だ」(1912:141)

「Ｉ」の根拠を内観に求めること，いわばデカルト的「Ｉ」観の否定である。そこに想定されるものを，形而上学的存在として議論から排してしまうのである。(4) そして，このような内観の「Ｉ」は，記憶の中にのみ捉えられるもの，しかも，社会的行為をモデルに他者と関連づけられて把握されるものだと論じる。

「内観に『Ｉ』として現れる自己は，自分自身に対して行為した自己についての記憶イメージであり，これは他者に対して行為するのと同一の自己である」(1913:143)

内観的に把握される「私」は，すでに客体となった「私」，つまり「me」であり，これを捉えているその時々の「私」ではない。記憶を思い起こしている「私」，「知る私」は常にそれ以前とは異なる「私」になっており，記憶の中の「主体」である「私」ではない。「知る私」と「知られる私」は一致しないということだ。つまり，「Ｉ」―「me」の再帰的連関は内観に根拠づけられるものではないということだ。

「個体が自分自身に対して客体ではなく主体となるのは，自分が，他者に対するのと同じように自分自身に対しても行為しているということに気づくからであり，また，個体が自分自身の社会的行為の対象となるのは，他者の行為から受けるのと同様の影響を自分自身の社会的行為からも受けているからである」(*ibid.*:143)

区別は社会的状況に求められるということだ。他者に対してと同様自分にも働きかけている「私」，すなわち「Ｉ」と，他者からと同様自分自身からも影響を受ける「私」，すなわち「me」。「内観」に現れる「Ｉ」は「他者と社会的

関係を取り結ぶ自己」であり（*ibid.*:144），内観の背後に想定される超越論的自我などではない。それは，社会的状況において他者に影響を与え，同時に自分自身にも影響を与えている「私」として，この状況の刺激―反応の連鎖の中に記憶として事後的に把握されるものにすぎない。また，内観における「me」は，社会的行為の「客体」である「me」と同一である――「彼が話しかける『me』は，彼の周囲の人々の社会的行為からも同じように影響される『me』である」（*ibid.*）。この意味で，内観における「I」と「me」の区別は，「社会的行為を行ったことの記憶イメージと，それに対する感覚的反応の相違」なのである（*ibid.*:143）。社会的状況における他者との具体的―直接的交わりの中で，他者と自分自身の両方に反応し，また他者と自分自身の両方から影響を受ける，その意味での二重の「社会的」存在として記憶の中にともに確認される「私」が，ここでの「I」と「me」だ。そしてそれらは，現象的に見れば社会的行為の位相に解消されるものなのである。

こうして，内観的自己観――「自己の本質は，その主体と客体を同時に意識することである」――が否定される。意識の流れの背後に純粋自我，「知者」である「I」を置き，「me」をこの流れに現れる客観的内容の断片だとする，ジェイムズ流の自己観が退けられる（*ibid.*:144f）。そして，この絶対的な「知者」の代わりに，実際の刺激―反応，記憶イメージ，動作に伴うあいまいな意識が置かれる。

> 「そこには，我々の意識の大部分，いや，我々が自己意識的だと呼ぶもののすべてが，つまり，我々が行い，口にし，考えているかもしれないことへの内的反応のすべてが伴われている。脳裏において我々は，他者に語った意見に対する自分自身による反論を，言い換えれば，他者に対する身振りや態度に応答して一定の態度や身振りを呼び起こすであろう神経感応を，明確さに違いこそあれ，ほとんどいつでも意識しているのである」（ibid.: 145）

それはまた，内観的観察者を行為主体と同一視する視角の否定でもある。神秘的な独立的実体として想定されてきた「I」は理論的視覚から外され，「自我」現象は一種行動主義的な説明に委ねられる。すなわち，内観の裏面に想定される観察者は，「個体独自の行為に責を負う真の（actual）『I』」などではなく，「自分自身の行為に対する自分自身の反応」にすぎないとされるのであ

る（*ibid.*）。ミードは続ける。実際の反応である「I」と内観において行為主体と想定されるものとが混同されてはならない。こうした混同こそが内観的自己観の誤謬を生み出している。

「実際の状況は次のとおりだろう。自己は，他者に関連して行為し，それとともに自らの周囲の対象を意識する。記憶の中で，自己は，行為の向けられた他者と行為する自己とを再統合している。しかも，これらの内容に加えて，他者に関連する行為は個体自身の内にも反応を引き起こしている。こうして，別の『me』，批判したり，賛同したり，示唆を与えたり，意識的に計画したりする『me』，すなわち，内省的自己が存在するのである」（*ibid.*）

かくして，「I」と「me」の自己は，「唯我論」的装いをすべて剝ぎ取られ，社会的状況に進行する実際の反応の連なりの中に行動論的に説明されるものとなる。つまり，内省的自己は，「他者とともに存在し行為する自己の記憶と，この行為に対する内的な反応とが組み合わされたもの」として社会的行為の文脈に語られるものとなる（*ibid.*:146;「内的意識は外的世界の社会的組織化の移入によって社会的に組織される」—1912:141）。そして，その中に経験される「私」は，常に「me」，様々な「me's」なのだ。

「社会的相互行為における自己意識的で実際的な自己とは，常に視野の外に架空の『I』を暗示しながら進行を続ける反応の過程を伴った，客観的な『me』あるいは『me's』なのである。」（1912:141）

さて，このような考察は何をもたらすのだろうか。すでに見たように，「私」なるものは，社会的状況に他者との関連を介してある種の「機能性」として初めてその「存在」を与えられる。内省的自己は社会的状況の中に語られるものとなり，絶対的存在としての「私」のごときものは理論的思考から括り出されてしまう。それは日常的思考とは異質の発想だろう。自分自身を含むすべての出来事は，個々の社会的（問題）状況に基礎づけられ，行為の流れの中で対象の型枠にあてはめられて初めてその「存在」を認識される。すべてが「社会的」存在，状況特定的存在だということだ。言い換えれば，すべてのリアリティがパースペクティヴァルだということだ（cf. Natsoulas 1985:69; 安川　1984; 1985a）。とはいえ，「私」なるものが「社会的」だとはいかなる意味においてのことなのか。

そこに初めて導入されるのが「役割」の概念である（cf. Joas 1980 [1985]: 110)。内省的＝自己意識的行為の進展は，「他者の役割」においてなされる。「『他者』と対面している個体は，その一方で，当の他者の役割を演じ，その見地から自分自身を呈示している」(1914:92)。つまり，社会的行為は常に他者の態度，あるいは役割の取得を介して行われるが，このことが常に自己呈示の前提となっている。我々は，「想像の中で，語調や身振りや，おそらくは顔の表情までをも真似しながら，他者の議論を自らの内に再現」し，このことを通じて自らの行為を組み立てていくのである（1913:146)。

「こうして，我々は自分の所属集団のすべての役割を演じている。事実，そうする限りでのみ，これらの役割は我々の社会的環境の一部となる。他者をひとつの自己として知覚しているということは，我々が誰それの役割を演じてきたということであり，その過程で我々は，相互作用の目的に応じてこの他者と他者の役割のタイプとを同一視しているのである。それゆえ，他者への我々の反作用に対する自分自身の内的反応は，社会的環境に応じて様々なものとなっている」(*ibid.*;傍点は引用者)

ここでいう「役割」は以前に語られた「対象の型枠」，あるいは「行為の図式」とほぼ等置することができるかもしれない。対面的状況における他者の役割の取得を介して，他者の反応の記憶イメージが自分自身の内的反応に流し込まれ，そこに「私」が内省的，状況関連的に把握される。しかも，注意されるべきことに，直接対面的状況のドラマ仕立ての自己が，やがては一般化され，集団全体のレヴェルに位置づけられるようになるものと論じられている。すなわち，後に「一般化された他者」として語られる議論の萌芽をここに見てとることができるのである。

「この過程が発展して思考の抽象的過程に変わるまでは，自己意識はドラマ的なものであり続ける。だが，記憶された俳優とこれに付き従うコーラスとの融合である自己は，なにがしかのゆるやかに組織化された，しかし明白に社会的なものである。後になって，この内的発達段階は思考として討論検討の場に変わる。劇中人物の目鼻立ちや語調は消え去り，内的会話の意味に強調が置かれるようになり，イメージが必要な手掛りとなることはまれになる」(*ibid.*:146-147)

もっとも，個々の状況を離れた普遍的なものに，さらに自己の「発達段階」

に関連づけてこのような議論がなされるのは後のことである。この時点で確認できるのは，個体の内的世界――自己意識――が役割を通して社会過程に関連づけられ，その一部として形成されると論じられている点にすぎない。けれどもそれは，「意味の意識」の考察を経て，さらには「役割」の，あるいは「態度の取得」の概念を通して，よりいっそう社会過程に開かれた議論になっているのである。次のような叙述を考察してみよう。

「自己は，それが単なる習慣の組織体である限り，自己意識的ではない。性格とは，このような自己のことである。けれども，何か本質的な問題が生じると，この組織体には何らかの解体が生じ，内省的思考の内に，様々な反応傾向が葛藤しあう様々な声として現れる。ある意味では，古い自己が解体してしまい，道徳的問題から新しい自己が生じるのだ」(1913:147)

ここに，自己の再編成の問題は「me」を焦点として捉え直されている。単に「個体としての個体」の仮説構成「機能」が無条件に期待されるわけではない。「新しい人間的価値を認識するに至った人が直ちに気づくものは，彼の行為に現れた新しい対象であって，この対象に対する自分の反応様式や，また自分自身ではない」(*ibid.*:147-148)。自らのうちに価値を求めるのではないのだ。議論は直接に社会的状況に向けられる。問題を解決しうる新たな行為図式が提示され，新たな価値と対象が社会的に構成される。新たな自己は，それとともに，あるいはその後に獲得されるものだと言われるのである。例えば，倫理的問題状況においては，一方に古い価値と古い自己，他方に新しい「行為傾向や衝動に対応する別の価値」と新しい自己が現れる。ここで，古い価値と自己に，すなわち，行為の習慣的性格とそれに伴う情緒的反応が特徴づける個体と世界の主観的領域に注意が向かうことを，ミードは自愛的（selfish）だという。対立しあう諸々の価値と自己はそれぞれの主観性という観点から語られることになり，問題の解決は，結局のところ自他いずれかを犠牲にすることになるからだ（*ibid.*:148)。

「けれども，問題が客観的に考察されるなら，葛藤は，たとえそれが社会的なものであっても，自己間の抗争に終わるのではなく，状況を再構成し，その結果，拡大されていっそう適切になった以前とは異なるパーソナリティを出現させるものとなることだろう。注目は，客観的社会的な領域に集中されるべきなのである」(*ibid.*:148)

古い自己はこうした関係を対立しあう諸々の自己との間に結ぶことを求められる。新しい目的や価値が提示され，それらが社会的に受容されて，新しい状況が構成される。その時初めて新しい自己が意識に上る。「問題の解決は，葛藤しあう諸々の利害関心を調和させる新しい世界を構成することによって達成される。この世界ができた後に，そこに新しい自己が入り込むのである」（*ibid.*: 149）。

ミードはこのような過程を科学者の仮説構成の営みになぞらえた。諸々の矛盾を解決しうる有効な仮説が定式化され，社会的に受容されれば，古い理論の描く世界は再構成され，科学者自身の位置もまた再確認されることになろう。それは，絶えざる問題解決の過程を通じて実現される，社会的自己の成長の過程であるが，そこに表現されているのは問題解決過程における個体としての個体の「機能」ではない。何ほどかの普遍化・一般化への指向性を伴う，社会過程としての社会的世界の再構成そのものが論じられているのである。

> 「自己は部分的な崩壊から成長していく。すなわち，内省のフォーラムに様々な利害関心が現れ，社会的世界が再構成され，その結果，新しい対象に対応する新しい自己が現れるのである」（*ibid.*:149）

内省の過程はまさしく社会過程の進行として考察されている。かつて，単に個体としての個体の機能だとされた行為図式＝仮説の提示は，ここに社会的世界の中に開示され，社会的世界の再構成の論理の内に語られるようになる。自己は，この世界の一部として，同じくこの過程で再構成されるものなのだ。個体の内的世界からこれを一部として含む社会過程全体へ――議論の焦点は決定的に移動している。

7．結びに代えて――普遍性の考察に向けて

要約しよう。「意味」は，社会的状況における，すなわち，複数の個体の関与する状況における，刺激―反応の結合関係として，その状況に客観的に存在するものとされた。この「意味」が意識に上る契機は問題状況に見出される。行為が幾重にも衝突し，その帰結を見通すことのできない状況である。こうした状況において，他者の，そして自己の「機能的存在」が注意を集め，この状況における自他関係の中に，自分自身の「機能的」位置が意識される。これが「自己意識」だ。こうして，「意味の意識」は，問題状況における自己意識に関

わっている――「意味の意識は，他者の身振りに呼応し，これをコントロールし，解釈する際の，自分自身の反応の構えを意識することである」(1910b: 132-133)。従って，やはり自己意識は状況特定的だ。自己は，個々の行為が方向を見失った社会的状況において，身振りのやりとりとして進行する刺激―反応の「関係性」が，過去の経験のイメージと結び付けられて結像されるひとつの対象なのである。かつて「Ｉ」と「me」の枠組みにおいて語られた自己の再帰的特性は社会過程に開かれたものとなり，また自己の再構成の過程は社会過程の展開の一部として語られるものとなる。

こうしてミードは，「意味」を，そして「自己」を，社会的状況における相互関連的行為に基礎付けた。この点で，論文「社会意識と意味の意識」の末尾に記された「意味の意識」の３要素はこの時期のミードの思考のひとつの到達点を示している。

> 「第一に，社会的状況。すなわち，他者の行為による刺激と，我々自身の反作用に姿を現す反応傾向とが，相互に影響を与えあっている状況。第二に，自分自身の身振りの価値を，他の個体の身振りに現れる変化という観点から意識すること。すなわち，個体は刺激と反応の関係を意識する。第三に，こうした関係が意識に現れる際の諸条件。すなわち，他者の身振りに応じてひとりでに生じた自分自身の態度についての感覚，そして，他者の身振りに起こるだろう変化についてのイメージである」(*ibid.*:133)

「社会行動主義」の内実とその社会学的含意を問い，これに全面的な回答を図るには，材料も議論も不十分だろう。端的には，ブルーマーに関する議論を追う中で触れた，普遍性の問題，そして，科学的営為の問題に言及しなければならない。また，その過程でミードが念頭においた「社会」，もしくは「社会的なもの」の内実を明らかにしなければならない。これらは20年代半ば以降のミードの諸論稿に展開される議論であり，ここでそれを詳細に跡づけるわけにはいかない。あるいは，常に語られぬままにされている「再構成」の力動を問わねばならないのかもしれない。だがそれでも，「意味」に関するここまでの議論は，こうした問題を考察する上で充分有効な論点を示唆してくれている。

ミードの議論を思い起こす時，まず確認されるべきは，それが既存の意味世界の「解体」に始まる議論だという点である。意味が社会的状況に「客観的」に存在していること，すなわち，ある種の意味の基盤（matrix）が，個々の

動作の，つまり「意味されるもの（referent)」の以前に存在することが繰り返し述べられているが，こうした議論は，社会的世界における諸対象の有機的連関を前提とするものだと考えていいのではなかろうか。(5)「個別的経験は組織化された構造を前提としている」という着想である（1917a:203)。

だとすれば，こうした諸対象の有機的連関――組織化された構造――の内実こそがまず問われるべきなのではなかろうか。それは，ミードの理論にどのような位置と叙述を与えられているものなのだろう。「対象の型枠」，「行為図式」，あるいは「役割」と論じられてきたものとの間に，何らかの関係を設定できるのだろうか。あるいは，後に「一般化された他者」として語られるものとの関連はどのように考えるべきなのだろう。――ここまでの議論から安易な結論を導くことはできない。けれども，いずれにせよミードの社会理論の性格を考える上でひとつの焦点となる問題ではあることは確かだろう。

ミードの「社会行動主義」は，個別的世界と社会的世界の行為関連的な――社会過程関連的な――議論を通して，とりわけ，「意味」の状況関連的な議論を通して，「社会的対象」の状況特定性を明らかにし，絶対的「個」の存在を社会的に相対化した。しかもそれは，社会過程全体を普遍的・一般的レヴェルで包括しうる理論的視覚への展開可能性を内包していたように思われる。従って，次なる課題は，後に展開される「客観的相対主義」の問題を含めて，「意味」と「対象」の概念をもとに，こうした着想を社会的世界全体の理論へと展開していくことだろう。

〔注〕

（1）本稿は安川（1986b）の後編にあたる。

（2）知覚に関する初期の議論は Mead(1907) を参照されたい。また，このような議論は，ドイツ留学期の問題関心にそったものだというヨアスの指摘がある（Joas 1981:182-183)。

（3）ミードは知覚を次のように語っている。――「知覚は行為の要素をすべて含んでいる。すなわち，刺激，態度に表象される反応，そして，反作用がもたらす最終的結果（それは，過去の反作用から生じたイメージに表象される）である」(PA 3)。

（4）ミードは後に次のように述べている。――「私は，人はいかにして『I』でありかつ『me』であることができるか，といった形而上学的問題を提起しようとしているのではない。私は，行為そのものを考察しようとする見地から，こうした『I』と『me』の区別にいかなる意味があるのかを問いたいのだ」(MS 173)

（5）こうした観点からミードの「社会行動主義」に構造論的側面を見ようとする一

群の議論がある。例えば，Rochberg-Halton(1982) Turner(1982) Wood & Wardell(1983) Alexander(1985) などを参照されたし。

文献

Alexander, J. C. 1985" The 'individualist dilemma' in phenomenology and interactionism." Pp.25-57 in S. N. Eisenstadt & H. J. Helle (eds.), Macro-Sociological Theory: Perspectives on Sociological Theory. Volume 1. London: Sage.

Joas, H. 1980[1985] G. H. Mead: A Contemporary Re-examination of His Thought. Camblidge: Polity Press.

——1981 "George Herbert Mead and the 'division of labor': Macro-sociological implication of Mead's social psychology." Symbolic Interaction 4(2):177-190.

Mead, G. H. 1907 "Concerning animal perception." Pp.73-81 in[SW].

——1909 "Social psychology as counterpart to physiological psychology." Pp.94-104 in[SW].

——1910a "What social objects must psychology presuppose?" Pp.105-113 in[SW].

——1910b "Social consciousness and the consciousness of meaning." Pp.123-133 in[SW].

——1912 "The mechanism of social consciousness." Pp.134-141 in[SW].

——1913 "The social self." Pp.142-149 in[SW].

——1914 "1914 lectures in social psychology." Pp.106-175 in[IS]

——1917a "Scientific method and individual thinker." Pp.267-293 in[SW].

——1917b "Consciousness, mind, the self, and scientific objects." Pp. 176-196 in[IS].

——1934 Mind, Self, and Society. Chicago: University of Chicago Press. [MS]

——1938 The Philosophy of the Act. Chicago: University of Chicago Press. [PA]

——1964 Selected Writings. Chicago: University of Chicago Press. [SW]

——1982 The Individual and the Social Self. Chicago: University of Chicago Press. [IS]

Natsoulas, T. 1985 "George Herbert Mead's conception of consciousness." Journal for the Theory of Social Behavior 15(1):60-75.

Rochberg-Halton, E. 1982 "Situation, structure, and the context of meaning." Sociological Quarterly 23(Autumn):455-476.

Turner, J. H. 1982 "A note on George Herbert Mead's behavioral theory of social structure." Journal for the Theory of Social Behavior 12 (2):213-222.

Wood, M.& M. L. Wardell 1983 "G. H. Mead's social behaviorism vs. the astructural bias of symbolic interactionism." Symbolic Interaction 6(1):85-96.

安川 一1984「G. H. Meadにおける行為とパースペクティヴ——self概念の再編成に向けて——」『一橋研究』9(1):119-135.

——1985「G. H. ミードの社会理論におけるホワイトヘッド自然哲学——パースペクティヴの客観性をめぐって——」『一橋論叢』93(5):689-708.

——1986a「『心的なものの定義』：主観性をめぐって——G. H. ミード『行為の哲学』に向けて（その1）——」『一橋研究』11(1):83-107.

——1986b「『社会行動主義』とG. H. ミード・I——G. H. ミード『行為の哲学』に向けて（その2）——」『一橋研究』11(2):105-132.

（筆者の住所：〒185 国分寺市戸倉4-3-56 根本荘201）